

〔原 著〕

## 子どもの「自己決定環境」の調査

筑波大学心理学系：新井邦二郎

筑波大学心理学研究科：澤田 匡人，楯 誠，市原 学，櫻井 良子

### Investigation of child's self-determination environment

Kunijiro Arai, Masato Sawada, Makoto Tate, Manabu Ichihara and Yoshiko Sakurai

#### 目 的

子どもの個性尊重の潮流のなかで、子どもの自己決定も注目を受けている。

大きな流れは、子どもの自己決定を尊重するものであるが、しかし他方において、その流れを危惧する声もある。

子どもの自己決定経験を調査した研究（新井，1996，1997）では、家庭のなかの日常的な基本的行動に関し、子どもの自己決定の経験が思ったほど多くないことが示されている。少子化傾向が徐々に強まるなかで、子どもに対する保護や干渉も強まってきていて、それが子どもの自己決定の機会を奪っていると考えられる。本研究は、子どもが家庭のなかで、自己決定がどの程度許されていると思っているか、あるいは自分のことに関しどの程度任されていると思うのかという、いわば「自己決定環境」の認知について、子どもならびにその保護者（親）に調査を行い、その結果を報告するものである。

#### 方 法

質問紙調査法を用いた。

被調査者

- (1)小学校5年生 341名（首都圏3小学校）  
の児童及び保護者
- (2)中学校2年生 473名（首都圏3中学校）  
の生徒及び保護者
- (3)高校2年生 457名（首都圏2高校）の生徒  
（保護者の調査は実施していない）

なお、質問内容によって欠損値の数が異なるので、質問内容ごとに有効人数が多少変動している。

#### 調査内容及び調査行動項目

##### A 調査内容

- (1)子どもの「自己決定環境」についての子どもの認知：子どもが家庭のなかでBで述べる14の行動について、「どの程度、任されているか。おとな（家の人）が口や手を出していないか」を尋ねた。
- (2)子どもの「自己決定環境」についての保護者の認知：子どもの認知の調査と同様にBで述べる14の行動について、「どの程度、子どもに任せているか。おとな（家の人）は口や手を出していないか」を尋ねた。

##### B 調査行動（自己決定行動）

新井（1996，1997）を参考にして、以下の自己決定行動について調査を行った。

- (1)どのような内容のテレビやビデオを観るか
- (2)登校する日の朝、起床するかどうか
- (3)夜、何時に寝るか
- (4)ふだん、どのような服を着るか
- (5)どのような髪形にするか
- (6)登校するかしないか
- (7)宿題を含めて家で勉強するかしないか
- (8)こづかいやお年玉をどのように使うか
- (9)どのような友だちと遊んだり仲良くしたりするか
- (10)学校でどのようなクラブ活動や部活動をするのか
- (11)習い事や塾に行くかどうか

- (12)将来、高校や大学にいくかどうか  
 (13)将来、どのような職業につくか  
 (14)将来、結婚するかどうか、またどのような人と結婚するのか

### C 回答方法

「すごくそう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「ほとんどそう思わない」の4件法で回答をリクエストした。なお、それぞれの回答を4, 3, 2, 1点にスコアリングした。

## 結果と考察

### 1 子どもの「自己決定環境」の認知の結果

#### (1) 主成分分析とI-T相関値・ $\alpha$ 係数

子どもの「自己決定環境」の認知質問紙の因子構造を明らかにするために、主成分分析を行った。Table 1は、14の質問項目のすべてが0.40以上の因子負荷量を示しており、子どもの「自己決定環境」の認知質問紙が1因子構造である

Table 1 子どもの「自己決定環境」の認知尺度14項目に関する主成分分析（因子パターン）

項目	F1	h <sup>2</sup>
05	68	46
03	67	45
07	64	41
08	63	40
04	63	39
11	62	39
14	62	38
12	60	36
09	60	36
13	60	35
10	56	32
01	56	31
06	49	24
02	41	17
因子寄与	4.97	

（因子負荷量と共通性については小数点省略）

と考えられる。

また、各項目のI-T相関値は、0.42～0.59に分布し、一定の高さの値が得られた。

さらに全項目の $\alpha$ 係数は、0.86であり、高い内的一貫性を示す数値が得られた。

#### (2) 平均値とSD

14の質問項目の平均値とSDをTable 2が示している。平均値3.0を越える項目が7項目見られ、全体的に得点が高い。それゆえ、これらの項目自体の判別力は小さいと考えられる。

#### (3) 学年差と性差

小学校5年、中学2年、高校2年の男女の各項目の平均値とSDをTable 3が示している。小学校5年生で男女とも3.0を越えた高い値を示しているのは、項目10であり、「学校でどのようなクラブ活動や部活動をするのか」については、自己決定が子どもに任されていると認知している人が多いことがわかる。

他方、項目2と6は、小学校5年生では0.20より小さい平均値を示している。項目2の「学校に行く日、朝起きるかどうか」と項目6の「登校するかしないか」の自己決定については、

Table 2 子どもの「自己決定環境」の認知尺度14項目の平均値

項目	平均値	SD
01	2.99	0.97
02	2.28	1.06
03	2.82	1.05
04	3.24	0.94
05	3.10	1.00
06	2.31	1.17
07	2.73	1.09
08	3.08	1.02
09	3.51	0.79
10	3.45	0.84
11	2.81	1.11
12	2.74	1.06
13	3.19	0.93
14	3.19	0.96

Table 3 子どもの「自己決定環境」の認知尺度14項目の学年差・性差  
( ) は SD

項目	小学5年		中学2年		高校2年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
01	2.48 (1.05)	2.28 (0.90)	2.96 (0.96)	3.06 (0.91)	3.26 (0.88)	3.30 (0.83)
02	1.94 (1.05)	1.94 (1.01)	2.37 (1.05)	2.30 (1.06)	2.42 (0.98)	2.35 (1.11)
03	1.98 (1.03)	1.86 (0.87)	2.78 (1.01)	2.80 (0.97)	3.34 (0.81)	3.30 (0.82)
04	2.45 (1.19)	2.74 (1.07)	3.35 (0.84)	3.24 (0.88)	3.53 (0.69)	3.50 (0.73)
05	2.24 (1.11)	2.60 (1.10)	3.02 (0.98)	3.23 (0.93)	3.42 (0.79)	3.48 (0.75)
06	1.73 (1.08)	1.69 (1.00)	2.30 (1.18)	2.10 (1.12)	2.61 (1.11)	2.77 (1.08)
07	2.07 (1.14)	2.16 (1.03)	2.77 (1.10)	2.65 (1.04)	3.06 (0.97)	3.05 (0.96)
08	2.66 (1.18)	2.19 (1.01)	3.15 (1.01)	2.99 (1.02)	3.42 (0.75)	3.40 (0.82)
09	3.43 (0.91)	2.98 (1.07)	3.49 (0.79)	3.45 (0.76)	3.70 (0.60)	3.70 (0.59)
10	3.40 (0.93)	3.01 (1.02)	3.37 (0.91)	3.35 (0.82)	3.60 (0.73)	3.70 (0.58)
11	2.34 (1.22)	2.16 (1.10)	2.77 (1.14)	2.73 (1.12)	3.02 (0.95)	3.27 (0.89)
12	2.74 (1.11)	2.23 (0.97)	2.73 (1.11)	2.55 (1.05)	3.00 (0.95)	2.91 (1.02)
13	3.08 (1.00)	2.75 (1.03)	3.30 (0.88)	3.09 (0.93)	3.29 (0.81)	3.26 (0.93)
14	2.86 (1.15)	2.56 (1.09)	3.28 (0.90)	3.05 (0.96)	3.47 (0.74)	3.36 (0.83)

小学校5年生の場合、自分に任されていると認知している人が少ないことがわかる。

さらに項目3の「服装」と項目4「髪の色」の自己決定では、小学校5年生において女子のほうが男子よりも任されていると認知する傾向が多少高い（有意差は見られていない）が、項目8の「こづかいやお年玉の使い道」（ $F(1, 239)=8.96, p<.01$ ）、項目9の「友だちの選択」（ $F(1, 238)=6.20, p<.05$ ）、項目10の「クラブ活動や部活動の選択」（n.s.）などにおいては、男子のほうが女子よりも自己決定が任されていると認知している傾向が見られる。

Fig.1は、14項目の総点の学年と性差をグラフに示した。学年と性の2要因の分散分析の結果、学年間（ $F(2, 1050)=169.70, p<.001$ ）、男女間（ $F(1, 1050)=3.72, p<.10$ ）、交互作

用（ $F(2, 1050)=1.91, p>.05$ ）であり、学年の主効果のみが有意であった。学年の主効果についてはTukey（HSD）法により5%水準で多重比較をした結果、各学年で有意差が見られ、小学校5年<中学2年<高校2年という結果が見い出された。なお、性差については小学校5年ならびに中学2年において男子の得点が女子よりも高い傾向が見られる（平均値とSD；小学校5年男子35.35（6.97）、女子33.22（8.39））、中学2年男子41.72（7.45）、女子40.63（7.88）。高校2年においては、このような差は見られない。

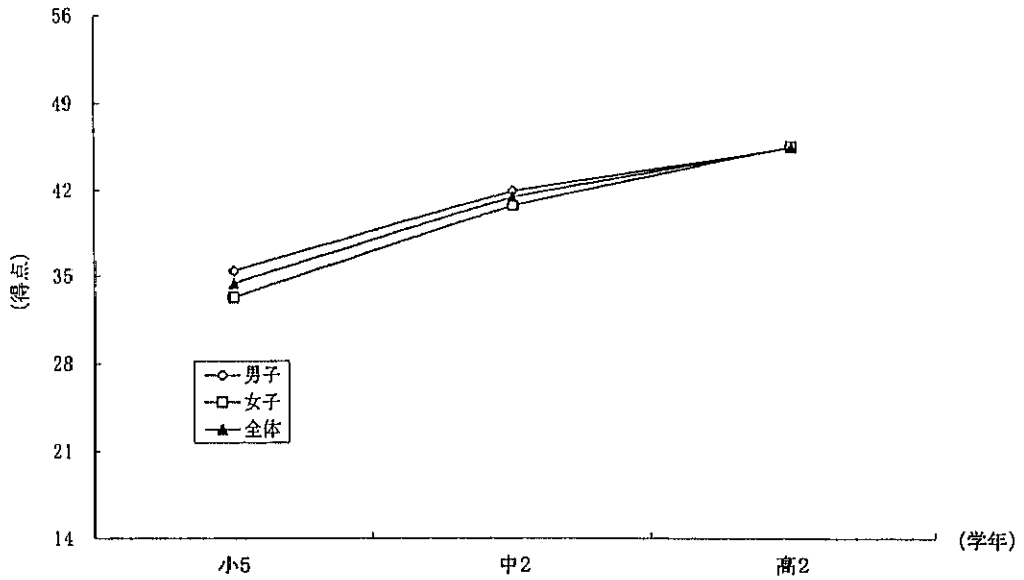


Fig. 1 児童・生徒の「自己決定環境」の学年差・性差

## 2 「子どもの自己決定環境」についての保護者の認知の結果

### (1) 主成分分析と I - T 相関値・ $\alpha$ 係数

「子どもの自己決定環境」についての保護者の認知の質問紙の因子構造を明らかにするために、主成分分析を行った。Table 4 は、14の質問項目のすべてが0.45以上の因子負荷量を示しており、「子どもの自己決定環境」についての保護者の認知の質問紙が1因子構造であると考えられる。

また、各項目の I - T 相関値は、0.41～0.59 に分布し、一定の高さの値が得られた。

さらに全項目の  $\alpha$  係数は、0.85であり、高い内的一貫性を示す数値が得られた。

### (2) 平均値と SD

14の質問項目の平均値と SD を Table 5 が示している。項目 9 と 10、13 と 14 の 4 項目が平均値 3.0 を越えている。したがって、これらの項目の判別力は小さいと考えられる。

### (3) 学年差と性差

小学校 5 年、中学 2 年の男女の保護者の各項目の平均値と SD を Table 6 が示している。小学校 5 年生の男女の保護者で 3.0 を越えた高い値を示している項目は項目 10 と項目 13、14 の 3 項

Table 4 「子どもの自己決定環境」についての保護者の認知尺度 14 項目に関する主成分分析 (因子パターン)

項目	F1	$h^2$
07	68	47
12	65	42
04	65	42
05	65	42
06	64	41
11	63	39
08	61	37
09	61	37
03	59	35
02	54	29
01	51	26
10	49	24
13	48	23
14	46	21
因子寄与	4.85	

(因子負荷量と共通性については小数点省略)

Table 5 「子どもの自己決定環境」についての保護者の認知尺度14項目の平均値

項目	平均値	SD
01	2.56	0.90
02	1.69	0.88
03	2.00	0.87
04	2.56	0.81
05	2.61	0.86
06	2.07	1.04
07	2.31	0.91
08	2.36	0.89
09	3.20	0.75
10	3.54	0.66
11	2.55	0.96
12	2.40	0.84
13	3.19	0.73
14	3.24	0.73

目であり、このうち項目13、14は将来の行動の自己決定であり、項目10が現在の行動の自己決定についてである。項目10は、「クラブ活動や部活動の選択」であり、この自己決定については小学校5年生でも子どもに任されていると保護者は認知している人が多いことがわかる。

Fig 2 は、14項目の総点の学年と性差をグラフに示した。学年と性の2要因の分散分析の結果、学年間 ( $F(1, 487) = 18.90, p < .001$ )、男女間 ( $F(1, 487) = 3.01, p < .10$ )、交互作用 ( $F(1, 487) = 0.06, p > .05$ ) であり、学年の主効果のみが有意であった。学年の主効果については Tukey (HSD) 法により 5%水準で多重比較をした結果、学年で有意差が見られ、小学校5年<中学2年という結果が見いだされた。

性差については、有意差まで至っていないが、有意傾向が見られ、小学校5年、中学2年とも女子のほうが男子よりも自己決定が任されていると保護者が認知する傾向が見られている (小

Table 6 「子どもの自己決定環境」についての保護者の認知尺度14項目の学年差・性差 ( ) は SD

項目	小学5年		中学2年		高校2年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
01	2.37 (1.03)	2.43 (0.86)	2.68 (0.79)	2.69 (0.90)		
02	1.53 (0.84)	1.70 (0.88)	1.67 (0.84)	1.93 (0.99)		
03	1.58 (0.67)	1.69 (0.81)	2.20 (0.84)	2.38 (0.87)		
04	2.23 (0.83)	2.61 (0.75)	2.63 (0.80)	2.75 (0.78)		
05	2.26 (0.85)	2.58 (0.80)	2.65 (0.86)	2.91 (0.79)		
06	1.88 (0.95)	1.83 (0.97)	2.15 (1.06)	2.27 (1.07)		
07	2.01 (0.85)	2.10 (0.91)	2.40 (0.86)	2.61 (0.95)		
08	2.03 (0.80)	2.12 (0.85)	2.50 (0.86)	2.67 (0.93)		
09	3.21 (0.80)	2.15 (0.78)	3.22 (0.69)	3.20 (0.77)		
10	3.69 (0.559)	3.63 (0.64)	3.45 (0.72)	3.47 (0.63)		
11	2.38 (1.01)	2.45 (0.95)	2.57 (0.92)	2.73 (0.99)		
12	2.52 (0.87)	2.45 (0.86)	2.32 (0.81)	2.38 (0.84)		
13	3.34 (0.69)	3.20 (0.66)	3.18 (0.69)	3.07 (0.86)		
14	3.32 (0.72)	3.20 (0.71)	3.33 (0.67)	3.09 (0.82)		

高校2年の保護者には調査を実施していない

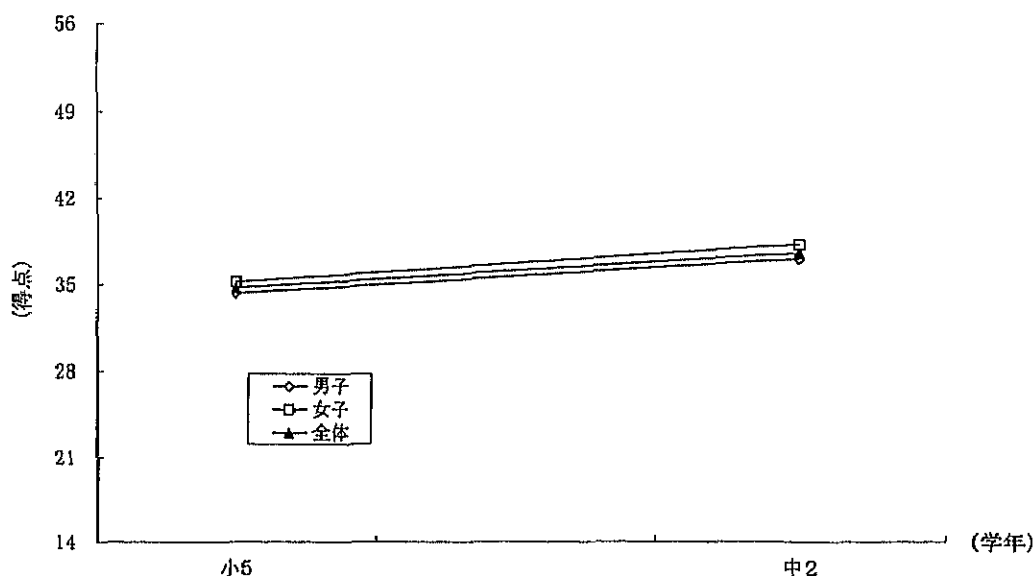


Fig. 2 「子どもの自己決定環境」についての保護者の学年差・性差

学校5年の平均値とSD；男子34.26 (6.67)，女子35.17 (6.62)；中学2年男子36.86 (6.76)，女子38.07 (7.29)。

### 3 「自己決定環境」についての子どもと保護者の認知の比較結果

#### (1) 平均値からの比較

小学5年生の子どもとその保護者の「自己決定環境」の認知の平均値とSDがTable 7に示されている。たいへん興味深いことは、子どもが保護者よりも「自己決定が許されている」と認知する項目のほうが、保護者が子どもよりも「自己決定が許されている」と認知する項目よりも、その数が多くなっていることである。そのうち有意差の見られたものは、項目2の「朝の起床」、項目3の「夜の就寝」と項目8の「こづかいやお年玉の使い方」であり、これらの内容の自己決定は親が考えている以上に子どもは自分に任されていると考えている。反対に、項目10の「クラブ活動や部活動」、項目項目13の「将来の職業」と項目14の「将来の結婚」の自己決定については、保護者のほうが子どもの考えている以上に子どもに任せている（「将来」のことは任せるだろう）と考えていることが分か

る。

中学2年生の子どもとその保護者の「自己決定環境」の認知平均値とSDがTable 8に示されている。小学5年生に見られた傾向がさらに顕著に示され、子どもが保護者よりも「自己決定が許されている」と認知する項目が増えている。特にそのうち有意差が見られたのは、項目1の「テレビとビデオ」、項目2の「朝の起床」、項目3の「夜の就寝」、項目4の「服装」、項目5の「髪形」、項目8の「こづかいやお年玉の使い方」、項目9の「遊んだり仲よくしたりする友だち」と項目12の「将来の進学」である。これらの内容の自己決定については、保護者が認知している以上に子どもは自分に任されていると考えている。反対に、保護者のほうが子どもよりも自己決定を任せている（任せるだろう）と認知している項目で有意差の見られたものは、項目11の「習い事や塾」、項目13の「将来の職業」と項目14の「将来の結婚」である。

小学5年生・中学2年生を合わせた子どもとその保護者の「自己決定環境」の認知の平均値とSDがTable 9に示されている。

#### (2) 相関値からの比較

小学5年生、中学2年生およびそれらの全体

Table 7 小学5年生における「自己決定環境」の子どもと保護者の認知得点 (SD)

項目	子ども	保護者	t検定
01	2.41 (0.98)	2.35 (0.93)	0.60
02	1.94 (1.02)	1.60 (0.84)	3.45**
03	1.91 (0.92)	1.61 (0.76)	3.37**
04	2.61 (1.14)	2.40 (0.81)	2.01*
05	2.43 (1.11)	2.42 (0.84)	0.10
06	1.79 (1.10)	1.82 (0.91)	-0.28
07	2.14 (1.06)	2.02 (0.83)	1.20
08	2.46 (1.09)	2.02 (0.80)	4.37**
09	3.23 (0.98)	3.17 (0.78)	0.64
10	3.19 (0.98)	3.65 (0.63)	-5.30**
11	2.25 (1.16)	2.39 (0.95)	-1.25
12	2.46 (1.07)	2.42 (0.84)	0.39
13	2.92 (1.02)	3.25 (0.68)	-3.61**
14	2.69 (1.11)	3.26 (0.72)	-5.78**
計	34.43 (7.67)	34.38 (6.57)	0.07

\* < .05, \*\* < .01

Table 8 中学2年における「自己決定環境」の子どもと保護者の認知得点 (SD)

項目	子ども	保護者	t検定
01	2.94 (0.93)	2.70 (0.84)	2.97**
02	2.34 (1.04)	1.77 (0.88)	6.48**
03	2.75 (0.98)	2.27 (0.85)	6.73**
04	3.29 (0.85)	2.67 (0.81)	8.18**
05	3.03 (0.94)	2.76 (0.83)	3.34**
06	2.24 (1.14)	2.25 (1.09)	-0.10
07	2.66 (1.04)	2.50 (0.92)	1.79
08	3.02 (0.99)	2.60 (0.90)	4.86**
09	3.41 (0.81)	3.22 (0.72)	2.72**
10	3.38 (0.85)	3.50 (0.64)	-1.75
11	2.76 (1.12)	2.66 (0.95)	1.05
12	2.63 (1.06)	2.35 (0.84)	3.21**
13	3.16 (0.92)	3.19 (0.73)	-0.40
14	3.10 (0.98)	3.24 (0.73)	-1.77
計	40.70 (7.34)	37.68 (7.07)	4.59**

\* < .05, \*\* < .01

Table 9 全体における「自己決定環境」の子どもと保護者の認知得点 (SD)

項目	子ども	保護者	t検定
01	2.71 (0.99)	2.55 (0.89)	2.47*
02	2.17 (1.05)	1.70 (0.87)	7.08**
03	2.39 (1.04)	1.99 (0.87)	6.06**
04	3.00 (1.04)	2.55 (0.82)	6.98**
05	2.77 (1.06)	2.61 (0.85)	2.42*
06	2.05 (1.15)	2.07 (1.04)	-0.26
07	2.43 (1.08)	2.30 (0.92)	1.88
08	2.78 (1.07)	2.35 (0.90)	6.32**
09	3.33 (0.89)	3.20 (0.75)	2.29**
10	3.30 (0.91)	3.57 (0.64)	-4.99**
11	2.54 (1.16)	2.54 (0.95)	0.00
12	2.56 (1.06)	2.38 (0.84)	2.73**
13	3.05 (0.97)	3.21 (0.71)	-2.73**
14	2.92 (1.06)	3.25 (0.73)	-5.27**
計	38.02 (8.09)	36.26 (7.05)	3.37**

\* < .05, \*\* < .01

Table 10 「自己決定環境」項目間の子どもと保護者の得点の相関

項目	小5	中2	計
01	0.21**	0.14*	0.21***
02	0.05	0.20**	0.15**
03	0.19*	0.14*	0.28***
04	0.24**	0.08	0.20***
05	0.13	0.18**	0.20***
06	0.03	0.16*	0.14**
07	0.09	0.19**	0.20***
08	0.06	0.16*	0.19***
09	0.15*	0.12	0.14**
10	0.06	0.06	0.05
11	0.19*	0.18**	0.20***
12	0.11	0.06	0.08
13	0.11	0.11	0.10*
14	0.13	0.10	0.11*
計	0.10	0.14*	0.20***

\* < .05, \*\* < .01, \*\*\* < .001



の子どもとその保護者の「自己決定環境」の認知得点の相関値がTable10に示されている。

小学5年生において、項目1の「テレビとビデオ」、項目3の「夜の就寝」、項目4の「服装」、項目9の「遊んだり仲よくしたりする友だち」と項目11の「習い事や塾」についての自己決定環境の認知得点に有意な相関が見られている。これらの内容の自己決定環境の認知については、子どもと保護者の間に似たような認知の生じたことが分かる。負の相関値は、どの項目においても見られなかった。

中学2年生では、小学5年生以上に高い相関値が全体でも見られた。そのうち、次の8項目、すなわち項目1の「テレビとビデオ」、項目2の「朝の起床」、項目3の「夜の就寝」、項目5の「髪形」、項目6の「登校するかしないか」、項目7の「宿題を含めた家での勉強」、項目8の「こづかいやお年玉の使い方」と項目11の「習い事や塾」についての自己決定環境の認知得点に有意な相関が見られている。小学5年生と同じ内容のもの（「テレビやビデオ」、「夜の就寝」「習い事や塾」）もあれば、異なる内容（中学2年生になって見られた内容：「朝の起床」「髪形」「登校するかしないか」「宿題を含めた家での勉強」、「こづかいやお年玉の使い方」）もある。特に後者の内容は、子どもが中学生になったことにより、保護者も子どもの自己決定に任せるようになっていくものと考えられる。負の相関値の項目は、皆無であった。

## 要 約

小学生（5年生）、中学生（2年生）、高校生（2年生）の子どもと保護者（親）を対象にして、家庭のなかでの基本的行動が子どもの自己決定にどの程度任されているのか（任せているのか）の「自己決定環境」を質問紙によって調査した（高校生は保護者調査をしなかった）。

その結果、学年が上がると、子ども、保護者とも、「自己決定環境」得点が高くなっていくことが認められた。子どもと保護者との比較では、小学生、中学生とも、子どもが保護者よりも、

自己決定が任されていると認知している項目が数多く見いだされた。この結果は、保護者が自覚的に子どもの保護や干渉を行っているのに対し、子どもは家庭のなかで自分なりに自己決定して行動していると捉えているというギャップの存在を示していると言えよう。

## 文 献

- 新井邦二郎 1996 小学生の自己決定経験の調査 筑波大学心理学研究 18, 75-95.  
新井邦二郎 1997 中学・高校生の自己決定経験の調査 筑波大学心理学研究 19, 7-19.